

『今』を生きよう① 「創造の秩序への招き②」 出エジプト記20:7-11

わたしたちはイスラエルの民がエジプトの奴隷生活から救い出されてからの歩みをたどりつつ、荒れ野で神の民として生きる姿からコロナ危機を生きるわたしたちへの主のメッセージを受けています。イスラエルの民はシナイ山のふもとに集まり、主と契約を結んで、正式に神の民として歩みだそうとしています。そのとき、主は10の言葉をもってご自分が最も望んでおられることやイスラエルの共同体へのビジョンを示してくださいました。彼らが主を深く知り、いつまでも主と共に歩むためでした。前回、共に分かち合った最初の2つの言葉は礼拝についてのメッセージでした。主はご自分の民が御前に立ち、ただ主を、世界の造り主として礼拝することを望んでおられ、情熱をもって民を礼拝の場に招いておられるということです。なぜなら、民が礼拝の場に立つことは混沌とした生活から創造の秩序へ立ち返ることであり、そのときに主は大いに喜ばれ、民には天地創造のときから備えられた豊かな恵みが注がれるからです。今日は引き続き3番目と4番目の言葉について分かち合いたいと思います。

「みだりに」

3番目のメッセージのキーワードは、7節にある「みだりに」です。主はご自分の民が主の名を「みだりに」唱えること、すなわち「むやみに使う」ことを罰せずにはおかれないと語られました。以前、インターネットで知らない人によって勝手にわたしの名前があげられ、コメントが書かれたのを見て、不愉快になったことがあります。けれども、ここで語られているメッセージは少し異なる話です。なぜなら、今のわたしたちと昔のイスラエルの人々は名前に対する理解が違ったからです。当時の人々は名前にはその人の運命が神秘的に内在していると思っていました。ですから、主はそのような理解の上で名前という言葉が使われたはずで、すると、主の名を「むやみに使う」ことは主を自分勝手に利用することになります。前回の2番目のメッセージで主を見える形に作ることは主を自分でコントロールしようとするのだと分かち合ったこととつながります。わたしたちは主の名を口にする中、くだらない話に主の名を軽く使ったり、自分の思いを主の名によって言ったりしてしまうかもしれません。

では、主の名は何のために示されたものでしょうか。どう使えば正しく使うことになるのでしょうか。主が10の言葉の最初から礼拝について語られていることから考えてみますと、主の名を礼拝、賛美、祈りのときに使うことこそ、主の名を正しく使うことだと思います。ですから、この3番目のメッセージを肯定的に言い換えてみますと、主はご自分の名を礼拝、賛美と祈りに使うことを望んでおられるお方であると理解できるのです。

今のわたしたちはイエスさまを通して新しい主の名を与えられています。「こう祈りなさい。『天におられるわたしたちの父よ、』」（マタイ 6:9）怖がらないで、主の愛を感じながら、主を呼ぶことができるのです。けれども、イエスさまも「父」という名を祈りの言葉として与えてくださいました。ですから、主の祈りにある「御名があがめられますように」という願いをもって、讚美のとき、礼拝のとき、祈りのときにたくさん主の名を呼びましょう。主はそのような礼拝を望まれ、喜ばれるお方です。

「聖別せよ」

次に4番目は安息日についてのメッセージです。キーワードは8節にある「聖別せよ」です。このメッセージは単に安息日を守りなさいという意味ではありません。8節を直訳してみると、「安息日を聖別することを心に留めなさい」になりますので、安息日そのものでなく、安息日を聖別することを「心に留めなさい」、すなわち「覚えて思い起こしなさい、忘れないようにしなさい」という意味です。では、聖別することは何でしょうか。安息日を他のものと別のものにする事です。ですから、8節は安息日を特別な日とし、それを忘れないようにしなさいというメッセージなのです。今のわたしたちはキリストが復活された主の日を安息日として守っていますので、主はわたしたちが主の日を特別な日として覚えて思い起こすことを望まれるお方であるというメッセージになるのです。

では、主の日を特別な日として覚えることは実際どういうことでしょうか。9-10節を読んでみますと、仕事をしないことです。もっと正確に言うと、六日間頑張っていた仕事をストップすることが主の日を特別にすることです。 どうしてストップする必要があるのでしょうか。11節によると、主の日に頑張っていた仕事をストップすることは、わたしたちが普通の生活のレベルから神さまのレベルに引き上げられ、主が世界を完成されてから取られた休息にあずかることです。そして、主がその日に注いでくださったあらゆる祝福を受けることなのです。前回、分かち合ったように混沌とした日々の生活から創造の秩序に立ち返るために必要なことは礼拝です。ですから、わたしたちは仕事をストップし、礼拝をささげることを通して主の休息にあずかり、そこであらゆる祝福を受けて、また生活の場へ遣わされていくのです。 けれども、ここには問題があります。わたしたちは頑張っていた仕事をストップすることが苦手だからです。いろんな理由によって仕事を続けようとするのです。

しかし、主はこのように語られました。「あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。」(10節 b)これにはだれ一人の例外もありません。わたしたちのすべての事情をよくご存じである主は、立ち止まれないたくさん理由があるにもかかわらず、わたしたち皆を礼拝の場、安息の場へ招いておられます。 ①車を運転しながらガソリンを入れないでずっと走り続けることができないように、立ち止まって給油することが創造の秩序だからです。いくら世界が多様化しても、すべての世界はこの秩序によって支えられています。②「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。」(マルコ 2:27)わたしたちがこの世界が造られたときに備えられたあらゆる祝福を受けながら、主と共に歩むために礼拝の場、安息の場が与えられたからです。③「わたしの民を去らせて、荒れ野でわたしのために祭りを行わせなさい。」(出 5:1)主がイスラエルの民を救い出された目的は荒れ野で礼拝をささげるためでした。聖書はわたしたちが主を礼拝するために造られ(イザヤ 43:21)、主の恵みをたたえるために救われた(エフェソ 1:6)と語っています。礼拝はわたしたちのアイデンティティです。 余裕があるときに行う活動ではないのです。

実際、ユダヤ人のように一日ずっと何もしないで安息日を守り、一日中に礼拝をささげるのは現代社会において不可能でしょう。けれども、大事なことは主の日に頑張っていた仕事をストップして礼拝の場に立ったかどうかではないでしょうか。量ではなく質のある礼拝をささげつつ、荒れ野のような時代を力強く生きるわたしたちでありたいと願います。